

基調講演

大学沿革史編纂の効用を考える

——特色の確認、アイデンティティの醸成、そして自校教育——

寺崎昌男

はじめに

一 「建学の理念」という問題

二 アイデンティティの醸成並びにテスト

三 自校教育の基礎として

結び

今日は最初にお話しする基調講演という役割ですが、これまでのことを、体験を踏まえていろいろ気楽に申し上げます。本論は後の先生方のお話なのだと思うので聞き流していただければ幸いです。レジュメに沿って資料などにも言及しながら、特色の確認、アイデンティティの醸成、自校教育という三つのことを中心にお話しします。

## はじめに

私自身の大学沿革史編纂とのお付き合いをまとめてみると、一九七一年〜二〇一四年までやってきたこととなります。今年あたりが多分最後だと思えます。

関東の大学が多いのですが、立教大学、東京大学、東洋大学、大東文化大学、拓殖大学、獨協大学、そして大阪女学院大学、女子美術大学の沿革史編纂やアーカイブズ建設にいろいろな形で参画してきました。一つ一つ思い出や経過や問題を話し出すときりがないので、本日は名前だけご覧ください。

例えば大阪女学院大学のようにまだ何もなかった大学がありました。そういうところでは、アーカイブズをつくるのが大事なのですということから始め、資料室が出来上がりました。女子美術大学は沿革史を作ることに協力いたしました。先生方が自分の大学の沿革史を探っていく中で、初めて美術創造活動がどれほど日本の近代的な女性の成立に力があつたかを発見され、その経過がしつかり書かれていました。私も序論を寄稿したりしながら、とても勉強になりました。

東京大学と立教大学は一番深く関わらせてもらいましたが、自分の中で分かったことの一つは、特色の確認の第

一步が「建学の理念」だという問題です。今や沿革史は引き出物ではなくなりました。かつては、本当にひと迷惑な引き出物で、厚くて、重くて、持って帰っても読む気にならない。ただ飾っておくだけ。そのうちご本人が亡くなると、子供さんたちが、これは始末してしまおうと言つて、くず屋に行く、というものが沿革史だったので。ところが、それが今変わつてきて、本当に大事な著作になってきました。

今日は残念ながら手元になかったので、資料を作つてこれなかったのですが、例えば大学基準協会の認証評価説明資料には、はつきり載っています。沿革資料、大学の歩みをきちんと保存できる施設を持つているか。客観的・学問的な沿革史を編纂しているか。こういう言葉が、戦後六十数年たつて初めて、大学の評価基準の中に登場してきました。全く画期的なことだつたと思います。うれしいことです。やつと沿革史が引き出物の域を脱し、大事な書類になつてきたのです。

## 一 「建学の理念」という問題

その大事さの中身の第一が、「建学の理念」の宣明です。実は、みんな「建学の理念は何だつたのか」を期待するのです。もちろん、文書資料による文字面の「確認」だけで済むなら非常に容易な作業です。当時の設立趣旨などから引っぱり出しておけばいいのです。しかし、本当に確定するには、歴史学的な確認作業が必要です。

立教大学では日本聖公会のウイリアムズ主教が実質的な創立者で、この方の残された「道を伝えて己を伝えず」という言葉が創立の精神だと言われていました。ところが、最近、ウイリアムズ主教の経歴をずっと調べていくと、

その言葉はウイリアムズ主教を慕っておられた日本人のお弟子さんたちが慕をつくられたときに、話し合つて、墓石に彫つた言葉だつたと分かつたのです。このように、創立者の精神を表す言葉だと言つても、本当にそうなのか、その言説誕生の環境をしつかり見ないと、判断が難しいのです。従来、福澤諭吉、新島襄、大隈重信、小野梓などカリスマ的な創設者がいる大学は、建学の精神が一番つかまえやすいと思われていました。また、仏典やバイブルのような聖典を持っている宗教学系大学も、建学の精神を確認する上で有利だと思われていましたが、必ずしもそうではない。その背後にある、どれが選択されたかという問題が重要だということが分かつてきました。

二番目に、そもそも「建学の理念」とは何か、それは全て高潔なものであるかという問題があります。それより先にそもそも「建学の理念」があるかないかが問題になる大学もたくさんあります。その第一は旧帝大です。東京大学は明治一〇年にできたときに、二つの学校「ヲ合併シ東京大学ト改称候条此旨布達候事」とする、という太政官達があるだけでした。ここには理念も何もありません。あつたのは、明治国家の「殖産興業」という理念だけで、これに「文明開化」というスローガンがまとわれていただけでした。他の帝大も同様に、「建学の理念」はなかつたのです。

そして、建学の精神や理念は全て高潔なものだつたかという点、そうではありません。殖産興業にしても高潔とは言えません。その他、世界の有名大学を見ても「建学の理念」が高潔なものばかりであつたかという点、全くそうではありませんでした。例えばジョン・ハーバードという無名の青年が、転がり込んだ大遺産をどう使おうかと思つて造つたのがハーバード大学だつたわけです。あるいは、西部開拓で大もうけをした鉄道会社であつたスタンフォード家が、やはり大学はつくらなくてはいけないだろうと言つてつくつたのが、今や「西のハーバード」と言われるスタンフォード大学です。そのように「建学の理念」は決して高潔なものだけではありません。新島襄のよ

うに銅像が立っていて、「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ」と書いてあるようなものは、非常に高潔な方です。

そもそも私は「建学の理念」はその大学の価値選択の歴史が語る精神、その系譜の基盤にあるものではないかと思つてゐるのです。それは学問的に正確な方法で説明して行けば非常にはつきりします。それをはつきりさせてくれるのが沿革史です。つまり、変転する社会と国家の在り方の中で、その大学はどういう道を選び、どういう道を選ばなかつたのかということを追求めていくと、その中にその大学のスピリットの元となつていて、それが建学の精神と云うべきものではないだろうか。そこまでが普通、ぎりぎりのところだと思ひます。

東京大学に関して言ひますと、普通はあまり言ひませんが、「各科全備」という言葉がしよつちゆう出てくるのです。これは東京大学の癖で、あらゆるときに、あらゆることに備えておくという考え方です。ですから、東京大学にはない学問はないと、敗戦のころまで東京帝大の教授たちは思つていました。その空気の途中で一番苦勞させられたのは、新しくできた、駒場の教養学部です。教養学という学問はないかかと、残りの七つの学部から言われしました。もう一つ苦勞したのは、私のいた教育学部です。東京大学には全部の学問があるのだから、教育学などは要らないのではないかと。そういう軽蔑の嵐の中で生まれたのが、教育学部と教養学部でした。

もう一つ、それよりずっと遅く生まれた薬学部も苦勞されたようです。医学部があるのになぜ薬学部が要るのだと言われて、一〇年後にできたのです。われわれが、つい身に付けている学部の序列史はそういうところから發生します。その元をたどつていくと、マイナスの建学の精神です。マイナスというより、むしろ当事者は、ドイツにあるようなウニフェルジテートの理念（幻想？）のもとで、あらゆる学部は東京大学にもあるということ誇り、

新学部を余計者扱いにしていたのでしよう。どういう道を選ばなかったかも、ある意味で、まさに建学の精神のもう一つの側面だと思います。

## 二一 アイデンティティの醸成並びにテスト

二番目は、「アイデンティティの醸成と、アイデンティティのテストに沿革史編纂はなり得るのではないか」というのが、私の経験から出た判断です。

一つは、沿革史編纂を本気でやると、アイデンティティの作成に当たったメンバーの間には、明らかなアイデンティティの意識が醸し出されます。別の言葉で言えば、一種のアカデミック・コミュニティが成立するのです。逆に言えば、アカデミック・コミュニティが生まれような土壌の中では、良い沿革史はできないのです。これははつきりしており、例がたくさんあります。中でいさかいが起きたり、不都合が起きたり、いつまでも解決できない論点を抱えたままであつたりすると、やはりうまくいかない。これは法則的と言つてもいいくらいです。

もしそれらを克服して、部局を超えた連携や理解ができると、だんだんとても良いものになつていきます。この「部局を超えた」というあたりがまた難しいところで、「理数系と文系を超えた」というように口で言うのは簡単ですが、お互いに理解し合うのは相当大変です。でも、その壁を乗り越えることは、良い沿革史をつくるポイントになつてきますので、この辺のつくり方はとても大事です。

もう一つは、これをやつていくときに、われわれ教育学者はテストを受けることになるのです。教育学は少なく

とも歴史的には小中高校の段階の教育の在り方を目指した学問です。大学史に一番近い教育学の領域は、日本教育史で、次が西洋教育史、さらに世界教育史です。西洋教育史は別として、日本教育史の方は非常に狭い範囲から発展してきました。日本教育史が日本で成立したのは、師範学校でした。師範学校は、小学校教員養成機関でした。この機関のカリキュラムに、初めて日本教育史が出てきました。明治一〇年代です。その日本教育史が少しずつ詳しくなり、発展して、敗戦まで来て、戦後は新しく生まれ変わり、いろいろな形で教育学部の選択科目の中に入ってきました。しかし、師範学校で生まれた学科目であったので、小中高校の教育の歴史に限られ、だんだん進むにつれて、小中学校における優れた実践の歴史を学生たちに教えることが中心の役割になりました。

師範学校は、卒業したら必ず小学校の先生をしなければならないという服務義務があつた機関です。もしその努めを果たしたくなかつたら、もらつた国費を全部返さなければいけません。そのようなところで大学の歴史などを教える必要は何もないわけです。ですから、日本教育史の本身は、小学校の教育の歴史、そして次第に強まってきた、小学校における教育実践の歴史、外国の場合はペスタロッチのような、子供の教育に力を注いだ人物の思想史となってきたわけです。そういう点では、いくら大学の沿革史に協力してくれと言われても、専門が違うので協力できない、というのが多くの教育史の専攻者の本音だと思います。

しかし、今後、沿革史編さんにとつて非常に大事になってくるのは、実は教育史的な背景からの貢献です。教育史研究者の側にとつてみると、新たな教育史は大学史を含めますか、という一種のテストにもなることを、教育史の人間は覚悟しなくてはいけないと思います。私はまさにその場に立たされてきましたが、最近、多くの方がその場に立つことになってきました。確か一昨年でしたか、初めて教育史学会が大会でシンポジウムを開きました。その一つしかないシンポジウムのテーマは「大学史研究を考える」でした。京都大学で開かれたその会に、たくさん

の人が来られました。非常に私はうれしかったです。やっておいてよかったですと思いました。

それから、沿革史の編さんを通じて先学・先輩を生んだ土壌の特性を確認できます。これは大きい意義です。名古屋大学と物理学・ノーベル賞との関わりなど特に深いものがありますね。これから沿革史を書かれる方は幸いですと思います。威張れる部分があるのですから。東京大学も威張れる部分はたくさんあったかもしれないけれども、東京大学が一番いい仕事をしていた時期にはノーベル賞がありませんでした。戦前にいくらウサギの耳にがんをつくってみせても、ビタミンDを発見しても、ノーベル賞は来ませんでした。ノーベル賞が来るころになると、東京大学ではいい仕事は全然出なくなり、私たちはとうとうノーベル賞のノの字も一〇〇年史に書くことはできませんでした。その点、名古屋大学は恵まれています。うんとお書きになつたらいいと思います。益川さんたちが受賞されたときに、あの研究のベースが名古屋大学理学部物理学科の教室憲章にあつたのだということを、私も周りの人に言つたのですが、マスコミはあまりそこには気が付いてくれませんでした。ああいうときに、ぜひ土壌と成果との関係を頑張つて公にしていきたいと思えます。

### 三 自校教育の基礎として

最近、沿革史を編纂する作業、その結果としてたびたび生まれてくる展示施設、そして展示施設を支えるベースとしてのアーカイブスの効用が、思いがけないところに出てきた感じがしています。それは学生諸君の間に現れ、新しい波になってきたと思えます。「よき沿革史の基礎と自校教育の正確な教材は同じ」と書いておきましたが、

これは沿革史をきちんとやればきちんとした講義ができる、沿革史がきちんとしていないと講義がなかなかできないということ。初めて可能な、マイナス面を含む「discourse」と書きましたのは、本当に良い沿革史をきちんと作ると、それは学生諸君に本当のわが大学の歴史を教えることができるということ。です。

私がこれに気が付いたのは一九九七年でした。一九九七年の春学期、忘れもしない、立教大学で全学共通カリキュラムが始まった年の総合科目（「大学論を読む」）で、ふと気が付いて、このことをやってみたのです。なぜやってみる気になったかという、目の前にいる、当時、四五人の各学部から来た新入生を主とする学生たちが、いかに立教大学を知らないかが分かったからです。私は、みんな立教のことをよく知って座っていると聞いていました。が、全員、よく知らないのです。「本当はどこに行きたかったの？」と言うと、男の子だったら大体「早稲田」と言うのです。女子学生は割に立教に来たことに対する満足度が高く、初めから立教大学に来たかったという子もいれば、中には「JARパックで来ました」と言う子もいます。JARは上智、青山、立教の頭文字を取った言い方で、その三つであればどこでも良かったというわけです。JARパックの共通点は、東京にある、格好がいい、上品なミッションスクールであるということ、入試のレベルが同じくらいということです。「立教が一番最初に発表があったので来ました」とか、聞いてみると、総長が卒倒しそうな理由です。彼らは偶然、立教にいると分かったのです。「建学の理念」も何も知らないで、座っていたのです。

「上智という大学はどういうところがつくったか知っている？」と聞くと、もちろん「知りません」と答える。「イエズス会というのだよ」と言うと、「イエズス会って、フランシスコ・ザビエルがイエズス会だったのではないでしようか」と、ふと世界史をやった記憶がよみがえるのです。「立教は？」と聞くと、「知りません」。「聖公会というのだよ」と言うと、「それはキリスト教ですか」と言うのです。何も知らないことが分かったので、私は刹那的に思いついて、

次の時間（開始後四時間目でした）からは、趣旨を変える、シラバスも無視し、「立教大学とは何か」をやると言いました。それで二時間講義しました。学生たちは、初めて聞いたという顔をしていて、ものすごく喜びました。私がそういう講義ができたのは、たまたまその年の三月末日に『立教学院百二十五年史』という史料集が発刊され、それに正確な史料があったので、講義をする材料には全然事欠かなかったからです。

その中で、学生たちはきれいな話だけを聞いているだけではつまらないらしいことも分かってきました。一番喜ぶのは、何と言っても特色です。上智と比べてどう違うか。青山と比べてどう違うか。明治学院と比べてどう違うか。同種性と異種性を言うとき、ものすごく彼らは喜びます。「先生、私は今日の講義で初めて、明治学院、青山学院と立教学院はどこが違うか、よく分かりました。私は国際比較法学科の学生ですが、教室に帰って、みんなに自慢してやりたい気持ちです」と。感想を書けとも言わないのに書いてくる学生が生まれて来たのです。あるいは、「私はやっと就職が内定して、来年卒業します。私は今までこの大学が嫌いでたまりませんでした。でも、この講義を聞いて、すごく好きになりました。卒業直前にこのような勉強をさせていただいて、本当にありがとうございました」。そういう感想が続々と出てくるわけです。それで分かりました。彼らは知らなかったのです。しかし、知りたかと思っていたわけでもありません。ですから、彼らが抱いたのは満足感ではなく、安堵感を得たのだということも分かりました。その材料になるのが沿革史編纂です。これは非常に大事なことだと思います。つまり、学生を含めたアイデンティティの形成です。

学生たちは何を学ぶかというとき、自分の位置、所在、帰属を、良き自校教育を受ける中で得ることができのです。自らを取り巻く願い、配慮、努力が分かかって安堵するのです。悪いことを話しても結構です。立教では今、「戦争と立教学院」という科目が開かれ、先生方が立教は戦時中にどれだけ恥ずかしいことをやったかを全部学生に話

しておられます。それでも学生たちは、「明日からこの学校を辞めます」とは言いません。そういうところに自分はいるのだと分かるのです。同時に、彼らが喜びをもつて理解するのは、高潔な部分です。例えば立教も頑張つて書籍を集め、幸い奇跡的に戦災を免れて、今、たくさんの図書館の本に恵まれていると分かってくる。そうすると、そこで落ち着いて勉強しようという気持ちになっていきます。

このように、沿革史のもたらす効用は意外に広がってきているのです。このことを一番よく調べていらつしやるのは、岩手大学の太田一毅先生です。この方が科研費を取つて、日本における自校史教育の研究（「大学における自校教育の導入実施と大学評価への活用に関する研究」）をされたので、非常に詳しい資料があります。お手元の資料②③をご覧になると、ただ野球やラグビーの試合を観戦に行つて騒ぐのが自校教育ではない、学校の講義を通して自校教育がどんなに大事か、学生たちはどういう大事なことを学ぶかがお分かりになると思います。

## 結び

大学の「窓」としての沿革史と展示館ということ、立教学院の展示館は今年の五月に開館したばかりですが、たくさんの方がお見えくださいます。京都大学の西山さんのところは立派な展示館で、私どもはその後、随分遅れてできましたが、おかげで大学の大事な「窓」になっています。数日前、近所のお寿司屋さんに行く時、ご夫婦が「ついこの間、立教の展示館に行つたよ」と言い、なかなか面白かったという話をしてくれました。これまで、図書館の中などには入らなかつた近所の方が、ご夫婦で見に来てくれて話をしてくれるので

す。親父さんが私の一つ年下なので、八一歳くらいでしょう。そういう点では、とてもいいポイントだったと思います。

本気で作ると、大学史を通じて、近代日本の教育・大学・学術の歩みが見える。この中で特に大事なものは、学術だと思えます。学術の歩みのところまで沿革史が踏み込んでいけるかどうか、勝負だと思っています。

今後、沿革史編纂をされる方は、近代史、日本史の専攻、あるいは法学部の先生ならば法制史のご専門や、やや歴史に近いご専門の方など、いろいろな部局から来られるでしょう。しかし、その中心が文科系になることは避けられないと思います。そのとき、どのくらい越境して理系の学部のところにも口が出せるかがポイントになってきます。実は沿革史編纂の方たちは、その勇氣を持つ必要に必ず迫られるのです。そこで負けないように、どんどん理系の分野、工学系、医学系等々の分野にも口を出して質問をし、あるところには注文を出し、出されたドラフトの書き換えを時にはお願いしたりするような勇氣が、大いに必要だと思えます。またそういう勇氣が許されるようなバググラウンドが、沿革史編纂の地位の向上とともに、出来上がって来るのだと思えます。これからのご奮闘をお祈りします。

(てらさき・まさお 立教学院本部)

## 大学沿革史編纂の効用を考える

— 特色の確認、アイデンティティの醸成、そして自校教育—

はじめに

大学沿革史とお付き合い 1971~2014 43年間 立教、東大、東洋大、大東文化大、  
拓殖大、獨協大、大阪女学院大、女子美術大、  
沿革史は引き出物ではなくなった 大学基準協会の認証評価説明資料

### I 「建学の理念」という問題

- 1 文書史料による文字面の「確認」は容易 — ただし注意は肝要 立教・ウィリアムズ主教の例  
— 旧帝大、新制国立大学等は特に困難
- 2 そもそも「建学の理念」とは何か それは全て高潔なものか  
— 価値選択の歴史では

### II アイデンティティの醸成（並びにテスト?）

- 1 作成にあたったメンバーの間に醸成される  
— 常に鞏固なものとは限らない  
— しかし部局を超えた連携と理解  
— 時にはテストにもなる
- 2 校友、時には近隣住民の方たちとも  
— 立教展示館発足の際の経験
- 3 先学・先輩を生んだ土壌の特性を確認  
— 名古屋大学と物理学・ノーベル賞  
— 沿革史編纂の側にも「覚悟」が必要  
— 各専門ディシプリンに踏み込んで書く

### III 自校教育の基礎として

- 1 よき沿革史の基礎と自校教育の正確な教材は同じ  
— 初めて可能な、マイナス面を含む disclosure
- 2 学生たちは何を学ぶか  
— 自らの位置、所在、帰属  
— 自らを取り巻く願い、配慮、努力

結び

大学の「窓」としての沿革史と展示館  
本気でつくれば—大学史を通じて近代日本の教育・大学・学術の歩みが見える

## 自校教育授業の類型

授業類型として、最も回答が多かったのは「自校理解教育」類型

(196授業中61授業：31%)

これに

「初年次教育 (29授業：18%)」

「専門領域導入教育 (17授業：9%)」

「大学史(自校史)教育 (17授業：9%)」

」

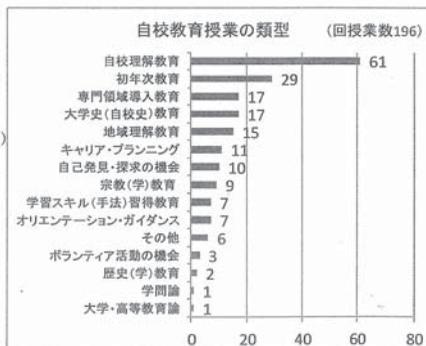
「地域理解教育 (15授業：8%)」

が続く。

★「フルバック」型授業においても

「自校理解教育」類型の回答

が最も多い。(34授業：60%)



## 自校教育授業の内容

自校教育授業の内容として

回答率60%を超えるのが

「自学の理念・建学の精神」

(133授業：68%)

「自学(学部)の沿革・歴史」

(125授業：64%)

これに

・「自学と地域社会の関係」

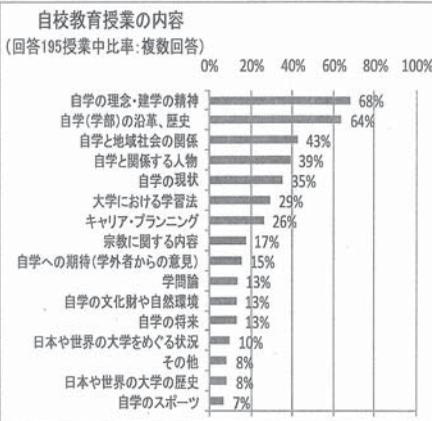
(83授業：43%)

・「自学と関係する人物」

(76授業：39%)

・「自学の現状」 (69授業：35%)

が続く



※地域社会との関係を重視する授業事例として、島根大学「島大ミュージアム学」。

島根大学 大川 教授の資料による。